

復 讐

ダルハーギーン・ノロブ

(訳)上村明

テーブルの下にうずくまった小さな黒犬が、こちらをまっすぐ見すえている。その大きな茶色の眼に、チョローンはやっと気づいた。一度もまばたきをしないその眼を見て、あれは犬の眼なんかじゃないと思う。犬はチョローンが動くたびに視線を向けるが、すぐにデムチグをにらみつけ彼から眼を離さない。デムチグが、ソファに並んですわった薄い陶器のように色白できゃしゃな女の、こめかみの毛をなでつけたり、手を握ったり、テーブルに並べられた料理や酒に手をのばしたりするたびに、背の毛を首から尻尾のねもとまで逆立たせて起き上がり、牙をむき出しにしてひげを震わせるのだが、声は決して出さない。

小犬がときどきちらっと上目づかいに見上げる視線の先をたどると、デムチグのちょうど後ろに壁掛けがあり、その真ん中に細長い青い絹布がかけられた額縁の写真があって、それを見ているのだった。写真の顔は、髪もひげも、眉毛や眼にいたるまで、すべてが荒々しく、いかめしく見えるが、唇の端にわずかにあらわれた笑みが、それを打ち消そうとしているかのように見えた。この遺影を見るたびに、犬の恐ろしげな目つきは、おどろくほど穏やかになり、瞳孔はいっぱい開き、涙がまぶたを濡らす。しかし、つぎの瞬間にはなにかから突然覚めたように、ふたたび瞳孔を針の穴のように細くして、火で貫くようにデムチグをにらみ据えるのだった。それは、主人を惜しむ眼ではない、心の底から憎しみをいだく人間の眼だった。犬の眼はこんなではない。餌を欲しがってじゃれついていても、寝場所を守ろうと吼えかかって来ても、こんな人間のような眼は決してすることはないと、チョローンはよく分かっていた。犬の視線がちらりちらりこちらをうかがうたびに、背中に冷たいものが走る。チョローンは、いたたまれなくなり、黒砂糖のかけらを投げ与えた。犬はそのにおいを丹念にかいで、自分の目の前に置く。そしてまたあの恐ろしげな憎しみの目でデムチグを突き刺すように見据えるのだった。

チョローンは、デムチグを引き寄せ、

「あの眼を見ろよ」

とささやいた。デムチグは怒ったように見つめたが、すぐに手を振って顔をしかめた。

チョローンは、やっとのことで「もう帰ろう」と小声で言った。

「娘夫婦がいっしょに住むならともかく、こんな空っぽの家ひとりきりで暮らせないわ。あの犬だけよ、家から出るときも帰って来るときもいつもここにいてくれるのは。わたし、あなたがいつ来るかと、毎晩待っていたの。葬式の時だって、あなたが来るんじゃないかと思って。あの人を死ぬほどこわがっていたって知り合いなんだから。もう怖がる人もいなくなったんだから、来てくれるでしょ」と女は静かに言った。

「もちろん来るさ」とデムチグは作り笑いをして、女の濡れたまつげを親指でぬぐう。

「穴から出てくるねずみを待ちかまえる猫のように、あいつの死ぬのを待っていると思

われて、お前に嫌われなくなかったのさ」こう言うデムチグの言葉は、いつもとは違って本当らしく聞こえた。

「怖がる必要なんてなかったのよ。あの人がいくら怖くたって、あなたは・・・」というのをデムチグはさえぎり、

「もういいだろう。俺もお前も怖かったんだ。でも今は俺がいつ来たって平気だろ？」と女の手をなでる。彼女は、苦いが心地よくもある思い出を頭に思い浮かべ、少し恥ずかしくなって、顔を伏せた。そして頬を赤く染めながら、

「わたしが怖いといっても、かまわず来るんでしょ」とゆっくりとした口調で言う。

「じゃあ、いいんだな・・・。でも、この犬は連れて行く。口かせはあるかい？」とデムチグは突然言い出した。

「なんですって？」と女は驚いた。

「俺になつかすのさ。そうしないと・・・。この目を見な」

「本当・・・。なんて恐ろしい眼なの」

「おい・・・。口かせを取って付けてくれ。俺はもう行かないといけない。これからひと仕事ある」

「でも、わたし・・・」と女は戸惑って弱い声で言うが、

「だいじょうぶさ。2・3日がまんするんだ。今度帰ってくるときは、俺を主人と思ってじゃれつく可愛い小犬になっているさ。それにスリッパも持ってくるように教え込むんだ。そうした方がいいだろう？」とデムチグは笑って女の太ももをつかんだ。

「仕方ないわ。そういう考えなら連れて行って。わたしのたったひとりの身内なんだから。なるべく早く連れて帰ってきて」と女は、胸の底からふかくため息をもらし、穏やかに言った。

女は、デムチグと犬にキスをして別れた。デムチグは犬を抱き、女は餌のやり方、散歩の仕方をデムチグに教え、泣いて見送った。

デムチグはまっすぐ家に戻ったが、犬は下ろさず、自分だけ中に入ると、すぐに長いものが入った袋を持って出てきた。それを後ろの犬の横の座席に投げ入れ、運転席にすわると、

「狩りに行くんだ。夜の狩りもいいぞ」と笑う。

チョローンは白タクでもして金を稼ぐつもりなんだろうと思った。そして、人間より犬をいっしょに乗せているほうが稼ぎがいいと計算したんだろうとぼんやり考えた。

しかし、デムチグは人の多い町の中心には向かわず、町のはずれに向かって車を走らせた。チョローンは不審に思った。それに、後ろの犬の火花をちらすような眼が、ときどきバックミラーにうつり、うなじの辺りに冷たいものが走るのを感じる。

そうして、町中を走りぬけ、どこへ行くとも分からない消えかかった田舎道をたどり、森の入り口に来ると、車は止まった。チョローンは、もう驚きを通り越して、デムチグになにも聞きただすことができなかった。というより、恐怖の虜となり、その気も起こらな

かった。何とも分からない不思議な冷たい予感に取りつかれて、声を出すことも動くこともできず、助手席に張りついているばかりだった。

助手席は、デムチグが女ともだちを座らせる席だった。若かろうが年とっていようが、美人も醜婦も、誰であれ、女ともだちであれば助手席に乗せて、ドライブするのが好きだった。しかし、よほどのことがないかぎり男は座らせない。それは、チョローンだけでなく、職場の誰もが知っていた。自分の奥さんだって座らせはしまいとみんな陰口をたたいた。それが、今晚はチョローンを誘うとこの席に座らせたのだった。

デムチグは、犬と袋に入った細長い物体を引きずりおろし、ヘッドライトのところに行った。見ると小犬の首輪には鎖がつながれ、それをデムチグが引っ張っている。犬が足を踏みしめて抵抗するのを、デムチグはとって帰り、飛び上がるほど蹴りあげた。起き上がるところをもう一度蹴りをいれ、雪の上を引きずりながら、ヘッドライトのあたるところまで引いて行く。そこには、唐檜の若木があって、デムチグはそこに犬をつないだ。プードルと呼ばれるらしいその小犬は、何度も肋骨が折れるほど蹴られても、鳴き声ひとつたてない。

木につながれた犬は、とてもかわいらしく見えた。種らくだのように毛羽立った胸の毛と親指ほどの小さな尾、手のひらほどの大きさの垂れた耳。体の毛はきれいにトリミングされていて、ちょうどライオンの胸のようだ。しかし、短い4つの足を踏みしめ、こちらをまっすぐ見据えるその眼には、炎が燃えあがっている。鎖から逃げようともがいたりもせず、許しを乞うて鳴き声をあげたりもせず、じっと立っている。デムチグは、細長い袋から、一丁の古木のような銃を取り出すと弾を込め、開いたままのドアの窓枠にそれを置き、狙いを定めた。

「むなくそ悪い眼をしたやつめ・・・お前のそのふたつの眼を撃ち抜いてやろうと思っていたんだが、気が変わった。そのど真ん中を撃ち抜いてやる」と言い、デムチグは身震いする。

チョローンは、小犬が死を恐れず、撃たれるのを静かに待っているのを、じっと見つめていた。銃声があると、犬は一瞬痙攣し、4本の脚を四方に投げ出した。怒りに燃えていた目は、しだいにその輝きをなくし、一瞬青い光がともると、それっきり消えてしまった。

デムチグは、大きなナイフをにぎり、犬のところに夢中で走って行った。そして、鎖をナイフで切ろうとしばらく格闘したが、すぐに気づき自嘲の笑いを浮かべながら、犬の首輪を断ち切った。それから、親指ほどの尻尾を根もとから切り取り、「人間に生まれ変わるな」と叫んで遠くに放り投げた。そうして、血のついたナイフと手とで雪をかき分けると、犬の死体をそこに置き、瓶に入ったガソリンを取り出して注ぎかけた。

火をつけ車にもどったデムチグの全身は、ガタガタと震えていた。やっとのことで、ウォッカのビンの栓を開け、口に流し込む。歯とビンがぶつかって音を立てた。そして、息を切らしながら、額の汗をぬぐうと、

「ウズメー、お前の夫の魂も何もかも跡形もなくかたづけちゃったぞ。あいつは、何年

も俺ののどに刺さった骨、行く手を阻む岩だった。いい加減むかついていたんだ。いつかきっと復讐してやると思っていたのさ。それが今やっとかなった」と誰にともなく言った。

それから2人はヘッドライトを消し、長いあいだ闇と沈黙の中にいた。

「ウズメーになんて言うんだい？」

やっとチョローンが口を開くと、

「もう二度とあそこに行くことはないさ」とデムチグが答えた。